平成二十六年三月一日 発行
昭和二十二年一月二十四日（第三種郵便物認可）
明治二十八年創刊 毎月一日・十五日発行

ときのこえ Good News for Japan

あこがれがかたちになった！

山谷 真

……あなたがたはこの福音によって救われます。
……すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおり
わたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、
また、聖書に書いてあるとおり３日目に復活したこと……です。
（コリントの信徒への手紙一 15章2～4節）

「神がいるなら見せてくれ。」

よく言われます。でも、見えないんですよね。

「どうして？」

神様は永遠で無限なので、見えないんです。

■

ちょっと考えてみましょう。私たちが見ることができる一番大きいものは何ですか？

スカイツリー？

富士山？

アンドロメダ星雲？

望遠鏡をのぞけば百億光年のかなたを見ることができるでしょう。それが一番大きいもの？

でも、神様は百億光年よりずっと大きいのです。私たちの目には収まらないですよ。ね？

■

「いや。そもそも永遠とか無限なんて、ないんだ！」そうおっしゃいますか？

もし、永遠も無限もないのだとして――じゃあ、どうして、私たち人間の心に永遠とか無限への「あこがれ」が生じたんでしょう？

〈いつかどこかへ帰りたい。どこかでだれかと会いたい。〉

そういう「あこがれ」って、私たち人間の生（せい）の営みの根底に流れてますよね？「あこがれ」に動かされて、いつかどこかへ、どこかでだれかに、と進んでいるのが、私たち人間ではないでしょうか？

聖書が伝える福音は、簡単に言えば、「あこがれ」が私たちのところへ〝かたち〟をとって来た、と言うことができるでしょう。

■

ちょっと信じがたいことですが、永遠で無限の神様が、ベツレヘムの家畜小屋の飼い葉おけのわらの上に、小さな赤ちゃんとなって来てくださった――それがクリスマスの奇跡なんです。それがイエス様なんです。

■

イエス様は、世間でいじめられ、馬鹿にされ、つらい思いをしている人のそばに来て、よりそい、友だちになりました。

『自分は完ぺきだ』と思っている人間が天国に入るのではありません。『こんな私は地獄に落ちて当然』と思っている罪人（つみびと）が心底悔い改めた時こそ、すっかり赦（ゆる）されて天国に入るのです。」そうイエス様はおっしゃいました。

■

本来、見えないはずの神様の恵み深さ・優しさ・憐（あわれ）み・美しさを、イエス様は見えるかたちにしてくださいました。その究極が十字架と復活です。イエス様は、私たちが受けるべき罪の罰を身代わりになって受けて十字架にかかって死なれ、三日目に死を打ち破って復活なさいました。

このことを信じ、イエス様を受け入れる時、私たちが目にする世界は、恵み深さ・優しさ・憐み・美しさに色どられた新しい世界になって見えるのです。

あなたも、イエス様の目で世界を見たい、イエス様を信じて生きたい、と思いませんか？

そう思われたら、ぜひ救世軍へ手紙を書くか、お訪ねください。

（救世軍士官〔伝道者〕）

謹んで震災のお見舞いを申し上げます。
一日も早い被災者の方々の心の平安の回復と、被災地の復興をお祈り申し上げます。

〈インタビュー〉

日々祈り、聖書の言葉に導かれ共に歩んで 55 年

大部基男（おおぶもとお）さん 津留子（つるこ）さん

広島県南東端、岡山県との境に位置する福山市。ここに救世軍福山小隊（教会にあたる）があります。この福山小隊に属し、長年、信仰生活を送っておられる大部基男・津留子さんご夫妻を、お訪ねしました。

―大部さんご夫妻は、この福山小隊に属してどのくらいになられるのですか。

基男　この福山小隊は、一九九一年六月に尾道小隊と岡山県笠岡市にある笠岡小隊が合併してできたものです。私はもともと尾道小隊に属していました。尾道小隊も笠岡小隊も歴史が古く、続いていれば、今年それぞれ九十七年、百十六年になります。私たちは、結婚してから数えると五十五年です。

―お二人とも尾道生まれですか。

基男　いえ、私の生まれは浜松です。両親が救世軍の士官（伝道者）で、当時は浜松で伝道していました。私が生まれたのは一九二八（昭和3）年で、ものごころがついた時はもう戦時でした。高等小学校を出ると、当時の父の赴任（ふにん）先から海軍に入りました。二年間で終戦になりましたが、終戦の前年の十二月二十七日、硫黄島に行った時、乗っていた輸送艦が攻撃されて沈み、百人の乗り組み員のうち半分が即死しました。私は九死に一生を得、それから翌年一月の終わりごろまでの一カ月間、草を食べて命をつなぎました。そして、次にやって来た輸送艦に乗ることができました。レイテ島を経由し、やっとの思いで日本の土を踏み、八月二十七日、貨物列車で尾道に来ました。

津留子　私は尾道生まれですが、小学一年の時、両親の仕事の関係でパラオに連れて行かれました。そこで女学校二年まで過ごしました。戦争が激しくなったので日本に帰り、一九四六（昭和21）年に尾道に戻りました。尾道で女学校を卒業し、幼稚園に勤めました。

―基男さんは、尾道に帰って来られてから、どんな仕事に就かれたのですか。

基男　軍隊から帰って二年間は個人商店で働きました。高等小学校しか出ていなかったので、働きながら、夜、学びたいと思ったのですが、思うようにいきませんでした。そこで、税務署なら夜間学校に通えるということで、試験を受けました。倍率七倍とも九倍とも言われた難関でしたが、無事合格しました。夜、大学で勉強することを考えて、東京の税務署に勤めることにし、きょうだい三人で、北区滝野川に住みました。

―東京でも、救世軍に通われたのですか。

基男　尾道では、救世軍士官の家庭という環境だったので、自然、小隊に行っていましたが、東京に来てからは、しばらく足が遠のいていました。すると、妹が神田神保町にある神田小隊に行くことを熱心に勧めてくれたのです。行ってみると、同じ年頃の青年たちがたくさん集っていて、聖書の学びも熱心におこなわれていました。それで神田小隊に属し、教会生活を送りました。

父はよく手紙をくれ、神に全き信頼を置くことと、無条件の服従ということを書いて寄こしていました。離れていても、両親がいつも祈っていてくれていることを感じていました。

また、当時の救世軍の指導者の方が書いてくださった「神第一」「祈りを常にする」という言葉をいつも見ていて、祈りなくして人生を歩むことはできない、と思うようになりました。

―夜学の学びを終えてから、尾道に帰って来られたのですね。

基男　本当は、両親を東京に呼び寄せようと思っていたのですが、父が糖尿病を患（わずら）っていたので、私が尾道に帰りました。

―そして、尾道で津留子さんと家庭をもたれた……。

基男　はい。三十歳の時、結婚しました。両親と同居でした。東京時代も含め、四十年間、税務署に勤めました。

―基男さんのご家庭はクリスチャンホームでしたが、津留子さんのご家庭はいかがでしたか。

結婚当時家族と（後列中央と右隣が大部夫妻、前列左から2人目と3人目が基男さんのご両親、その右隣が津留子さんの母上）

津留子　一般的な日本の家庭と同じく、仏教の家庭でした。主人と結婚してはじめてキリスト教というものにふれました。

―基男さんがクリスチャンだということをご存じで結婚されたのですか。

津留子　はい。私自身は教会には無縁でしたが、結婚のお話があった時、相手が信仰をもっている、ということに心を動かされました。

でも、結婚して、主人の両親とも同居で、最初はなかなか、キリスト教の信仰生活というものに馴染めませんでした。朝起きて祈り、聖書を読み、食事の前に祈り、日曜日は小隊で礼拝を守り……。

―それは、ずいぶん戸惑ったことでしょうね。

津留子　はい。それでも、月日が経つうちに、だんだん教会に行くことの大切さを覚えていきました。ただ、子どもが小さい時は、礼拝に出ても聖書の話を十分に聞くことができず、何のために来ているのかわからないこともありました。

―いつから信仰をもつようになったのですか。

津留子　そうですね。いつ、ということではなく、長い間に自然に、ということでしょうか。主人や主人の両親、そして小隊の信徒の皆さんの祈りに支えられ、だんだん御言葉（聖書の言葉）を理解するようになりました。御言葉を聞くことによって、心に平安をいただけるようになったのです。それに、家族が一つ心にならないと、子どもを育てることが難しかったですから。

基男　子どもは三人与えられましたが、育てる上で大切なことは、子どもに信仰をどのように伝えていくか、ということです。また、家族と共に祈ることの大切さを子どもたちに知ってほしいと願っていました。

子どもたちは、私たち夫婦だけでなく、両親、代々の小隊長（牧師にあたる）、そして小隊の信徒の皆さんの祈りの中で大きくなり、現在、娘は同じ小隊で日曜学校教師として奉仕しています。折にふれ、孫たちと御言葉に養われる機会が与えられていることは、本当に幸せなことです。

娘さん夫婦とお孫さんたちと共に

―津留子さんは、信仰をもって、どのような変化がありましたか。

津留子　何か、困難な事に出遭った時は、自然に祈るようになりましたし、御言葉を読もうと心が動くようになりました。折々に、

「神のなされることは皆その時にかなって美しい」（伝道の書3章11節　口語訳聖書）

という御言葉が心に浮かぶのですが、本当にそのようになっている、と感謝しています。

―基男さんの好きな御言葉はどのようなものですか。

基男　新約聖書ヨハネによる福音書三章一六節です。

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」

（口語訳聖書）

年齢とともに、私の行く先はどこか、誰に会えるのか、とか考えるようになりましたが、キリストが天の国で迎えてくださる、という確信をいただいています。

―お二人のこれからの抱負はどのようなものでしょう。

基男　御言葉に、

「あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ」

（伝道の書12章1節　口語訳聖書）

というものがあるのですが、これは、すべての人にとって大切なことです。福山小隊では、青少年伝道を中心にして活動していますが、私もできる範囲で力を尽くしたいと思っています。そして、日々、祈り、聖書に親しみ、充実した日々を送りたい、と願っています。

津留子　私は近所に伝道紙『ときのこえ』を配ること、友人のところに『ときのこえ』を持って行くことを、これからも続けていきたいと思っています。

（福山小隊（教会）所属）

社会鍋の奉仕をする大部夫妻

あなたに伝えたい聖書の言葉

主（神）は恵みに富み、憐れみ深く
忍耐強く、慈しみに満ちておられます。
主はすべてのものに恵みを与え
造られたすべてのものを憐れんでくださいます。

（詩編145編8、9節）

ハレルヤ。
わたしの魂よ、主を賛美せよ。
命のある限り、わたしは主を賛美し
長らえる限り
わたしの神にほめ歌をうたおう。

（詩編146編1、2節）

わたしは主に望みをおき
わたしの魂は望みをおき
御言葉を待ち望みます。

（詩編130編5節）

あなたの御言葉は、わたしの道の光
わたしの歩みを照らす灯。

（詩編119編105節）

どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。
何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、
求めているものを神に打ち明けなさい。そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。

（フィリピの信徒への手紙4章6、7節）

キリトリ

ご氏名

ご住所

□私の近くの救世軍を紹介してください。
□キリスト教についてもっと知りたいです。
□『ときのこえ』の購読を申し込みます。

この部分を封書か葉書に貼り、裏面下の救世軍にお送りください。

救世軍とは
The Salvation Army

聖書の神を信じ、イエス・キリストを唯一の救い主とする、プロテスタントの国際的なキリスト教会です。

創立者はイギリスのメソジスト教会の牧師だったウイリアム・ブース。一八六五年、東ロンドンの貧しい人々、社会から顧みられない人々の物心両面からの救いを目指して、働きを始めました。現在は、世界百二十六の国と地域で、助けを必要としている人々のニーズに応えながら、神の愛を伝えています。

その特徴は……

① どのような人も、神を信じるなら即座に救われ、聖い生活を送ることができる、との信仰に立っています。そして、その信仰の体験談を、信徒は様々な機会に自由に話します。

② 人々の多種多様なニーズに迅速に応えるため軍隊流の組織をとり、機動力・団結力を活かして活動しています。また、伝道者や信徒は制服を着用し、クリスチャンであること、いつでも手助けする用意があることを表しています。

③ 創立時から、アルコール依存症者の回復支援の働きをおこなっているため、伝道者や信徒はアルコール抜きのライフスタイルをとっています。

④ 男女は完全に平等で、職位、役割、奉仕、責任において、何の差別もありません。

⑤ どこへでも出て行って神の愛を伝えるため、ブラスバンドを用います。また、ブラスバンドに合わせ、タンバリンを様々な奏法でたたくのも、救世軍独特のものです。これらは、会館の中での礼拝でも、積極的に用いられています。

⑥ 伝道者や信徒は、機会をとらえて、自分にできるボランティア活動をおこない、率先して献金するとともに、募金活動にも従事します。

救世軍の日本での働きは、一八九五年（明治28）年に始まりました。現在は、四十五の小隊（教会にあたる）と十一の分隊（伝道所にあたる）、二十の社会福祉施設、二つの病院（ホスピス併設）を通して働きを進めるとともに、街頭生活者支援、災害被災者支援などをおこなっています。

☆東日本大震災の被災者への支援活動

宮城県、岩手県など、被災地に対する復興支援活動を継続しています。物質面での支援とともに、いろいろな機会を通して精神的にほっとできる場と時を提供しています。

宮城県南三陸町「南三陸さんさん商店街」の近くに建設されたポータルセンター（仮設大型テント・多目的ホール）では、ホールの断熱と防音のための改装工事がおこなわれます。このホールが音楽コンサートにも使えるようにとの目的でなされるものです。これは、今までにトランペット奏者フィリップ・スミス氏やニュージーランドの救世軍バンドから救世軍に託された寄付金を含め、米国の救世軍SAWSOの支援を受けてなされます。

昨年、ポータルセンターでおこなわれた救世軍ブラスバンドのコンサート

救世軍克己週間募金（三月～四月）

皆様のご協力をお願いいたします

救世軍では、毎年３月～４月に、克己週間という募金の期間を設けています。克己とは、辞書に、「おのれにかつこと、意志の力で自分の衝動・欲望・感情などをおさえること」とありますが、今から 130 年近く前、創立者が「それぞれ１週間だけ何かを節約して、そのお金を献げよう」と呼びかけたことに端を発しています。当時、ヨーロッパにも救世軍の働きを広げるため、その資金を集める必要があったのです。これが第１回の克己週間募金となりました。以来、毎年、世界の救世軍で支援を要する人々のために募金がおこなわれ、用いられてきました。この期間中、信徒がまず克己、節約をして献金するとともに、広く一般の方々にもご協力を呼びかけています。

現在、世界中の救世軍で集められた寄付金は、イギリスにある国際本部に送られ、万国克己週間基金に組み入れられます。そして救世軍の国際的ネットワークを通じ、開発途上国や災害被災地、難民の支援などのために役立てられています。また、ここ数年、日本で集められた寄付金の一部は、南アメリカ西部にある国々―ボリビア、チリ、エクアドル、ペルー、ヨーロッパのポルトガル、アフリカのルワンダ、ブルンジ、アジアのバングラデシュなどの貧困や災害に苦しめられている人々のニーズに応える支援活動にも用いられています。

フィリピンの台風被害被災者支援

ご献金は以下の方法でご協力をいただいています

●戸別訪問

制服を着用した伝道者や信徒が伺い、趣旨を説明してご献金をいただきます。

●郵便による送金

郵便振替
口座　00180 － 5 － 4400
加入者名　救世軍本営

現金書留
〒 101 - 0051
東京都千代田区神田神保町 2 - 17
救世軍本営

※どちらも、「克己週間募金」とお書きください。

● インターネットによる送金

救世軍ホームページ
http://www.salvationarmy.or.jp
※寄付目的の欄に「S.D.collection」とお書きください。

▷**お問い合わせは、救世軍本営 伝道事業部まで**
TEL 03-3237-0881

創立者　ウイリアム・ブース　大将　アンドレ・コックス（万国本営　英国ロンドン）　日本司令官　勝地　次郎（救世軍本営　東京都千代田区）　http://www.salvationarmy.or.jp

発行日及び定価

▼発行日　毎月一日・十五日

▼定　価
一日号一部五〇円（〒六〇円）
十五日号一部六〇円（〒六〇円）
クリスマス特集号（十二月一日号）
一部一〇〇円（〒六八円）
一年分　一三七〇円＋郵送料七二八円
振替・〇〇一八〇―五―四四〇〇

発行兼印刷人　救世軍　代表者　勝地　次郎
編集人　齋藤　惠子
〒101―0051　東京都千代田区　神田神保町二ノ十七
電話　東京(03)三三七―〇八八一
発行所　救世軍本営
印刷所　図書印刷株式会社

（取扱支部）

救世軍は、統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、右救世軍にご相談ください。

（この欄に通信文を書くと第三種扱いになりません）